

## 『宇治拾遺物語』における「夢」の分類

趙 智 英

はじめに

古典文学における「夢」といえば、柳田國男氏<sup>①</sup>や西郷信綱氏<sup>②</sup>をはじめ、多くの研究者により論じられてきた。特に古典文学における夢を論じる際には、夢占いや夢解き、夢違え<sup>③</sup>などの問題について、古川哲史氏<sup>④</sup>、樋口清之氏<sup>⑤</sup>、佐々木孝二氏<sup>⑥</sup>、井本英一氏<sup>⑦</sup>、酒井紀美氏<sup>⑧</sup>、会田実氏<sup>⑨</sup>などに多くの研究の蓄積があることは周知の通りである。

これらの先行研究は、「夢」という大きなテーマについて、その事例を紹介したり考察したりするために「文学作品」を用いることで、神や仏など超越的な存在との交感、交信の媒体となるものとして夢が持つ力、夢への信仰がいかに強かったかを明らかにすることが多かった。

一方、「文学作品」において「夢」という素材を見出す手法とし

ては、池田利夫氏や河東仁氏などの成果が挙げられる。

例えば、池田利夫氏は王朝文学の諸作品を対象に、夢という語がこれらの作品においてどれほどの頻度で登場しているのかを数値化することで分析されている<sup>⑩</sup>。また、河東仁氏は物語を中心として、また森田兼吉氏は女流日記文学における夢に関して考察されている<sup>⑪</sup>。いずれの先行研究も、各々手法や取り組み方は異なるが、夢が持つ力、当時の夢への信仰を裏付けるといふ方向性は共通している。

このように夢の研究は、ジャンルにおいても日記、物語、説話など多岐にわたっているが、『宇治拾遺物語』に関しては事例の一環として取り上げられる場合はあるものの、逆に『宇治拾遺物語』そのものを研究対象として捉え、夢を（説話構成の）素材の一環として取り上げる研究は山手節子氏<sup>⑬</sup>や山口康子氏<sup>⑭</sup>の論考以来、あまりなされていない。

成立時期については鎌倉初期とされる『宇治拾遺物語』は、世俗的な信仰のあり方が語られる仏教説話から、素朴な民間伝承を素材とする説話、艶笑譚に至るまで一九七話の説話から成る。編者が未詳であるだけでなく、説話収載や配列の基準も不分明で、出典が未だ明らかでない説話もあり、何を伝えようとしているのか些か悩ましい場合もある。しかし、そのような説話集において夢がどのような方法のもとに描かれ、説話の中にどのように組み込まれているのかを追究することは、編者の編集意識や叙述傾向を探る手掛かりになるのではないかと考える。

本稿では『宇治拾遺物語』を対象とし、一つの研究視点として夢に着目し、従来の『宇治拾遺物語』における夢に関する研究動向を概観するとともに、夢が登場する説話における、夢のはたらきや作用についての分析を試みたい。

#### 一 『宇治拾遺物語』における夢に関する研究の現状

『宇治拾遺物語』における夢に関する先行研究の代表例として、山手節子氏は、全一九七話の説話のうち、夢の出現する一五話を取り出し、(1)夢で見る出世、(2)夢で行動する人間、(3)夢でみる信仰、(4)夢に出現する死人、(5)無常の利鬼、(6)夢の話に分ける。中でも「夢で行動する人間」に重点を絞り、「連想の糸」<sup>15</sup>を頼

りに夢の位置とそれが意味することを考察されている。山手氏は益田勝実氏<sup>16</sup>の説を受け「『宇治拾遺物語』の説話の世界は、「連想の糸」で縫われているようである」という見解を示しつつ、「夢は一九七話中ほぼ均等に出現していることになる。それも各巻のほぼ中心に位置している。これは、編者が夢に重点を置いていることを物語っているのではあるまいか」と推察されている。

しかし、『宇治拾遺物語』は『今昔物語集』のように、編者によつてはじめから徹底した編集が行き届いていたわけではないと考えられ、そもそも『宇治拾遺物語』諸本の巻序は二冊本、四冊本、五冊本、八冊本、一五冊本などさまざまであり、このように区切られた巻々のどれにも編集の上での中心点は認められず、分量の上で適宜に区切ったものとしか見られない<sup>19</sup>、『宇治拾遺物語』の巻の立てかたはいずれも便宜的なものであって、組織化されたものとは言い難い<sup>20</sup>といわなければならない。

こういった見解を踏まえると、各巻の中心部分に夢の出現する説話が収載されていることが編者の意図と直結するかどうか、断言し難い。よつて、山手氏の見解は今一度検討し直される必要があると思われる。

山口康子氏は『宇治拾遺物語』において夢の引用の持つ意味を検討されている。山口氏は夢はどのような働きを持っているかを考察

するため、夢の内容をA「現実の事象」の予告・説明・解釈（一）  
 実現した事態の予告の夢、二 不思議な現実の説明の夢、B「現  
 実の幸福」にかかわる夢（一 致富をもたらす夢、二 病氣平癒を  
 もたらす夢）、C「前世の因縁」を解明する夢（一 前生の解明、  
 二 後生の解明）に分類し、夢に出現するものを神仏、死者、その  
 他に整理された。②① として「通覧すると、夢は、神仏の世界、死後の  
 世界、更にまだ存在していない未来の世界と交流する手だてと思わ  
 れてくる。すなわち、この世ならぬ世界・異界の存在を知り、そこ  
 に居るものたちと交渉を持つことができるのは、夢という方法だけ  
 であるように思える」と述べておられる。

もちろん、夢は古くから神意をうかがうことのできる神霊的な場  
 として、記紀等に記されるものであったが、この世ならぬ世界・異  
 界の存在を知り、そこに居るものたちと交渉を持つ手段は、別に夢  
 だけというわけではなく、陰陽師による占いや加持祈祷、和歌など  
 を通じることでも可能だったと考えられる。

他の手段は、『宇治拾遺物語』第一〇八話「越前敦賀女観音助給  
 事」とほぼ同一の内容を持つ『日本霊異記』中巻三四話「孤嬢女  
 憑」敬観音銅像「示」奇表「得」現報「縁」の記事から辿ることができ  
 る。これは、貧しい女性が観音菩薩の利益を得る説話で、父母を亡くし  
 独りになった娘が悲しみ、「聞」観音菩薩者所「願能与」、其銅像手繫

繩牽之、共「花香灯」、用願「福分」日」と、観音菩薩に夜となく昼と  
 なく泣き訴える。

木村紀子氏はこの記事について「霊異記中第34において、女が観  
 音に切実な願いごとをするにあたっては、「像に繫けたる繩を引き」  
 ながらしたという記述がみられた」と述べる。すなわち、「像に繩  
 をかけてそれを引き、仏像に意を通じようとする行為は、霊異記で  
 は、「神主（執金剛）の間に繩を繫げて引き」（中第21）（柏瀬）観音  
 菩薩の手に繩を繫へ引きて白して言はく……我に錢を施せ」（下第  
 三）など他にもみられ、初期造仏時代独特の意思伝達をはかる作  
 法だったようである」という。また「今昔卷16―第8の相当部分は、  
 「観音二懸奉レル糸ヲ引テ」となっており、これは、臨終に阿弥陀  
 仏の手に五色の糸を懸けて引く（今昔卷15―第12・第40など）作法  
 を連想する」と指摘しており、それに代わる方法が「夢の中でお告  
 げを得るといふのではなかったかと思われる」と続けておられる。

このように、神仏、死後の世界、未知の世界と交流する術がある  
 中で、『宇治拾遺物語』の編者が色々な交信手段の中でも、夢とい  
 う方法を重視していることは興味深い。

## 二 孤立話における夢

江口孝夫氏は『宇治拾遺物語』一九七話のうち、夢を扱ってい

る説話を抜き出すと、二四話がある」といい、次のように分類されている。大系本により「出典がある」とみられるものを拾うと、

『古事談』四、六三、六四、六七

『今昔物語集』九二、九六、一〇二、一〇八、一一二、一一八、

一二一、一六七、一六八

『古本説話集』八八、八九、一〇一、一三一、一九一、

その他 四六、八二

を挙げるといふ。そして江口氏は『宇治拾遺物語』だけにあるものは、二、五七、七〇、一六五話（数字は説話番号）の四話である。『宇治拾遺物語』は夢はとくに関心を持ったとはいえないようである<sup>28</sup>と述べておられる。

江口氏が「『宇治拾遺物語』だけにある」ものとして分類した二、五七、七〇、一六五話は現段階で同文話の指摘がなく、固有の説話と考えられている説話群<sup>29</sup>のうちの四話である。この「『宇治拾遺物語』だけにある」説話を、今、仮に「孤立話<sup>30</sup>」と称するとすれば、「このような孤立話は、『宇治拾遺物語』だけに存在するということにおいて、まさに『宇治拾遺物語』の独自性を体現するものであり、孤立話のうちに『宇治拾遺物語』の特質は集約されているのではないか<sup>31</sup>」と必要性を唱える説がある。

それでは、「『宇治拾遺物語』だけにあるもの」として江口氏が挙

げた四話のうち、現時点では同文的同話が見当たらず、孤立話とされる第五七話「石橋下蛇事」における夢のはたらきを検討してみよう。

本話は、小林智昭氏が「菩提講の滅罪生善の功德とか、畜生道や人間に生まれ変わるという転生思想などが色濃くからみついて、時代信仰の特色を現わしている<sup>32</sup>」と批評されているように、雲林院の菩提講の功德や転生思想、夢告、蛇身を受けた者の報恩譚などを組み合わせた説話として読めるが、最終的には、身分相應の幸福を得るといふ、極めて庶民的な結末にたどり着く。様々な主題とモチーフが用いられている複雑ともいえる説話である。

五七話の冒頭に、雲林院の菩提講に参詣する女性が登場する。ここに通りかかった二、三〇歳ばかりの女房が、石橋を踏み返すと、下から一匹の蛇が出てきて、その女房の後をついて行く。女房をついて行く蛇を、菩提講に参詣した女性が尾行することから、徐々に話が進んで行く。はじめて本話を読むと、事件の目撃者、第三者に見える女性を中心となり語られるという展開方式は、読者の予想を裏切り、想像力を掻き立てる。そして後半で、女房の夢に腰から上は人で下は蛇の清らかな女が出てくる。女房は、目撃者である女性に、夢で見た事柄を話す。

ところで、会田実氏は「夢は他人に告げることで力を發揮する事

例は多く、夢で見たことがら・象徴的イメージが秘める意味を正確に言語化しなければその夢は叶わない<sup>33)</sup>という。また、山口康子氏は「語られることよってしか夢は「この世ならぬ世界」との境界域としての存在を主張することができない。夢がどこから生じ来たるものにせよ、人の言葉を通してしか姿をあらわし得ない。そういう夢の性格を『宇治拾遺物語』の夢は明らかにしている<sup>34)</sup>」と、夢で見た事柄を言葉で発することの重要性について強調している。そうであれば、女房と蛇をずっと観察していた女性は、女房が夢で見た事柄を語る相手として、重要な任務を果たしている<sup>35)</sup>と見ることができ

きる。女房の後について行く蛇と、彼らを尾行し観察する女性を巡る、謎に包まれた状況が、説話の後半、夢告げにより一挙に蛇の正体が明かされ、報恩の意思が伝わり、現実<sup>36)</sup>にその利益が実現する。夢の中で蛇の正体が明かされ物語が急展開を迎えることで、夢告げは謎解きの役割をしており、すなわち、五七話は夢が謎解きのはたらきをする装置として用いられているのである。

五七話と同様、第一六五話「夢買人事」は、同文的同話は見当たらないが、周知のように夢を売買するモチーフを持つ説話である。夢の売買といえは、新潟県を中心に日本各地に分布している民話「夢買長者」がよく知られており、文献資料においても『曾我物語』

「太山寺本」巻二には、「時政が女の事」の段から「橘の事」の段にかけて、北条政子の夢を売買する事例が知られている。

さらに、夢を売買するモチーフは、日本のみならず韓国の文献にも見ることができ。高麗の建國神話『高麗史』「高麗世系」や、一三世紀、朝鮮の高麗王朝の時代に書かれた『三國遺事』「太宗春秋公」にも、姉妹が夢を売買する記事が見える。日本の夢を売買する説話と、韓国の夢を売買する説話とが互いに影響を及ぼしたものがどうかという問題は今後の検討にゆだねる他ないが、夢を買う側を中心に語られ、代価を払って夢を買い取る行為は正当とみなされ、判断力や決断力に富んだ先見の明がある者の行動として評価される点で共通している。と同時に、次のような一六五話の特質が明らかになる。

まず、一六五話は夢の売買を重要モチーフにしているものの、他の事例とは異なり、夢の内容についての記述が見当たらない。

また、『曾我物語』、『三國遺事』、『高麗史』の事例は、いずれも血縁関係の間柄で夢の売買が行われ、吉夢が力を発揮し、貴姓との結縁、偉大な人物の出生を得る。

なお、夢の売買というのは「夢を売る人と夢を買う人の間に売ろうとする気持ちと買おうとする気持ちが共有され、合意される地点にいるとき成り立つことができる<sup>35)</sup>」という意見もあるように、三つ

の事例は夢を売買する二人の間に、信頼<sup>36)</sup>が根底にある。そして、そこに嫉妬、欲望という心理が加わっている。

しかし、同じく夢の売買が行われていても特に留意すべきことは、一六五話は売買行為に介入者の「夢解の女」が登場することである。夢の売買が成り立つ際に、不可欠の要素「すなわち信頼、嫉妬や欲望」という感情の方向性が別々に分れて用いられることで、夢の売買が「商売」の一種に転換されている。

一六五話では、夢解きの専門家である第三者「夢解の女」が、夢の所有者を決める決定権を握っており、その第三者の指南のもとに夢が取られ、夢を取った者は謝礼を夢を見た人ではなく第三者に与えている。ここで、気持ちの共有や互いの合意は「夢を見た人⇕夢を買う人」の構図ではなく、「夢を見た人↓夢解きの女↑夢を買う人」という方向性に変わっているのである。

伊東玉美氏によると、もともと夢解の女は「古代以来、見た夢がどのようなメッセージなのか解説する「夢解き」「夢合わせ」という職業」だったらしく、「いい夢を見ることが大事だが、それをどう扱うかはそれ以上に重要なのである」<sup>37)</sup>という。まさに一六五話は物語全体にかけてそれを示唆している。夢の内容は一切記されず、夢そのものが貴重な宝物のように買い売りされ、「されば、夢を人に聞かすまじき也といひ伝へたり」と締めくくる話末評語が、「宇

治拾遺物語」の編者における夢の捉え方を象徴しているよううかがえる。

この二話を検討してみると、『宇治拾遺物語』独自の説話に夢が登場する場合は、夢に対する『宇治拾遺物語』独自の思想が表れているのではないかという可能性が浮かび上がる。では、『宇治拾遺物語』全体における夢が登場する場合は、どのような様相を見せるだろうか。

### 三 夢から見る説話の分類

本稿では『宇治拾遺物語』において「夢」が出てくる説話（計二七話）を、ストーリー展開における夢のあり方を基準に、次のように分類したい。

- a. 夢合せ・夢解き型
  - a-1 第四話「伴大納言事」
  - a-2 第一六五話「夢買人事」
- b. 予言・神仏が出現型
  - b-1 第六三話「後朱雀院、丈六仏奉<sup>レ</sup>作給事」
  - b-2 第七〇話「四宮河原地蔵事」
  - b-3 第八八話「自<sup>ニ</sup>賀茂社<sup>ニ</sup>御幣紙米等給事」
  - b-4 第八九話「信濃国筑摩湯二観音沐浴事」

「夢」が出てくる説話一覧

夢合わせ・夢解き	結 果	話 末 評 語	類 型	備 考
×	翌年、平茸が全く見あたらなかった	されば、いかにもいかにも、平茸は食はざらんに、事かくまじき物とぞ。	d. 出来事の真実型	複数の人物が同じ夢を見る
○	善男は上京し大納言まで昇るが、罪を受ける	然る間、善男、縁につきて、京上して、大納言にいたる。されども猶、罪をかぶる。郡司がことばにたがはず。	a. 夢占い・夢解き型	
×	葬儀の礼を執り行なって京へ出る途中、聖の後は餓鬼、畜生、虎、狼、犬、鳥、数方の鳥獸が続いて歩いてきて四条の北の小路で糞をたれたことから、糞の小路ではあまりに汚いので錦の小路と呼ぶようになった	×	その他	c. 出来事の発端型 「夢ともなく、うつつともなく」
×	大官司は国司により湯船に閉じ込められ処罰されたままだった	人の悪心はよしなき事なりと。	d. 出来事の真実型	神が出現し、出来事の発端を明かす
×	さる御大臣に仕える富裕な家司の妻となる	さて、この女、よに物よく成て、この比は、なにとは知らず、大殿の下家司のいみじく徳あるが妻に成て、よろづ事叶てぞ有ける。尋ばかくれあらじかしとぞ。	d. 出来事の真実型	
×	丈六の仏を造り、その仏像は比叡山の護仏院に安置した	×	b. 予言・神仏が出現型	
×	×	×	d. 出来事の真実型	夢告げ物語
×	村の家々は流行病にかかって大勢死んで、一軒だけ助かった	僧都、此よしを聞て、かつげ物一重、たびてぞかへされける。	d. 出来事の真実型	高僧の魚食二話と共通するモチーフ
×	地藏を納めて置きつ放しにしていたことを思い出し、急いで開眼供養を営んだ	×	b. 予言・神仏が出現型	
×	塔の下に立っている地藏の足が本当に焼けていた	「いまにおはします。二尺五寸斗の程にこそ」と人は語りし。これ語りける人、拝みたてまつりけるとぞ。	d. 出来事の真実型	
×	長櫃に詰められた紙や米が減ることがなかったので、たいへん裕福な法師になった	猶、心長く、物語ではすべきなり。	b. 予言・神仏が出現型	
×	夢に見えたのと同じ格好の男が現れ、この男は法師になりその名を馬頭観音と呼んだ	×	b. 予言・神仏が出現型	
×	鹿は助かり、その後は、天下は安泰、国土も豊かであり続けたという	×	c. 出来事の発端型	

『宇治拾遺物語』における「夢」の分類



〈表1〉『宇治拾遺物語』において

	話 番号	巻と 話順	標 題	夢を見る者 (夢見手)	内 容	夢を語る 場面	夢を語る相手
1	2	巻1・ 第2話	丹波国篠村平 茸生事	①里の長老 ②里の住 民たち	①②髪の毛が伸びた法師が二、三十人ほど 現れ、長い間宮仕えをしていたこの里からよ そへ行くことになったと告げる	○	妻や子など
2	4	巻1・ 第4話	伴大納言事	善男	西大寺と東大寺を跨いで立つ	○	妻、きはめたる 相人
3	19	巻2・ 第1話	清徳聖、奇特 事	清徳聖	3年前に亡くなった母が現れ、私はもう仏に なったと告げた	×	×
4	46	巻3・ 第14話	伏見修理大夫 俊綱事	大宮司	熱田の神が現れ、かつて法華経を千部読んで 我を供養しようと百余部を読み奉った僧を、 おまえが追い払ってしまい、その僧が今国司 となって生まれ変わったことを告げる	×	×
5	57	巻4・ 第5話	石橋下蛇事	石橋を踏 み返した 女	腰から上は人で下が蛇になった美しい女が現 れ、「私は人を恨めしいと思っていたばかり に蛇の姿にされ石橋の下で長い年月を過ごし ていたが、昨日あなたのおかげで助けられた。 そのお礼として、よい男に巡り合い、幸せに なるようにしてさしあげます」と言う	○	女
6	63	巻4・ 第11話	後朱雀院、丈 六仏奉り作給 事	後朱雀院	御堂入道殿が現れ「一丈六尺の仏像を造った 人の子々孫々は決して三悪道に落ちることほ ない。私は多くの丈六の像をお造り申した。 だからあなたは必ず成仏なさる」と言った	○	明快座主
7	64	巻4・ 第12話	式部大夫実重 賀茂御正體拜 見事	人	賀茂の大明神が「また実重が来た」と言っ て嗅いていた。ある夜、実重が下の社に参籠し た晩、上社に参詣する途中、中賀茂のあたり で天皇の行幸にお会いした。見ると、鳳輦の 中に金泥で書かれた経文が一巻あり、そこには 「一称南無仏、皆已成仏道」という表題が 書かれていた	×	×
8	67	巻4・ 第15話	永超僧都魚食 事	魚を供し た者	恐ろしそうなる者どもが、その近辺の民家にし るしをつけて歩いてきたが、自分の家には、 永超僧都に魚をさしあげた所であるからとし るしをつけなかった	○	僧都
9	70	巻5・ 第1話	四宮河原地蔵 事	下種(下 賤の者)	大路を通る者が「地藏さん、明日、帝釈天が 地藏会をなさるのにはおいでになりません か」と声高に聞くと、家の奥から「まだ目が 開かないので、参れそうにもない」と言うや り取りが開こえた	×	×
10	82	巻5・ 第13話	山横川賀能地 蔵事	僧都	ある僧が「賀能知院が塔の下を通る際、時々 拝んで通ったので賀能が無間地獄に落ちたそ の日、この地藏菩薩はすぐに助けようとして 一緒に地獄においでになった」と言った	×	×
11	88	巻6・ 第6話	自二賀茂社一 御幣紙米等給 事	僧	①清水へ参れ②賀茂神社に参って申せ③おま えがこうして参るのが気の毒だから、御幣紙 や打徹の散米などを必ず授けようと言われた	×	×
12	89	巻6・ 第7話	信濃国筑摩湯 二観音沐浴事	信濃国の湯 の近くに 住む人	明日の正午に観音様が御入浴にみえるという 夢を見る。その姿は、三十ばかりの鬚の黒い 男が、綾筒笠をかぶって、節ぐろの胡録に皮 を巻いた弓を持って、紺の狩衣を着て、鹿の 夏毛の行藤を履き、茸毛の馬に乗って来ると いう	○	人々
13	92	巻7・ 第1話	五色鹿事	国の后	体毛は五色で角は白い、大きな鹿がいた	○	大王

『宇治拾遺物語』における「夢」の分類



×	一本の薬しべからたちまち富裕な長者になった	×	b. 予言・神仏が出現型	
×	醍醐天皇は回復し、聖は長い年月修行をし、姉の尼君も本国に帰らずそこで修行をしていたという	×	b. 予言・神仏が出現型	
×	書写供養をしてやると、その後また二人の夢に心地よさそうになった敏行が現れた	×	d. 出来事の真実型	複数の人物が同じ夢を見る
×	男と娘はねんごろに観音にお仕えし、二人は長命し、子を産み、幸せに暮らした	この男女、たがひに七八十に成まで榮へて、男子、女子、産みなどして、死の別にぞ別ける。	b. 予言・神仏が出現型	
			その他	「夢」語を使った比喩表現
×	寺の物を勝手に食べているのだと思うと疎ましく嫌な気持ちになって物も食わずに退出し、その後は別当のところへ通わなくなった	×	d. 出来事の真実型	
×	その夢を見てから六日目という朝の十時頃に大仕事をしてきたような様子で牛が帰ってきた	×	b. 予言・神仏が出現型	故人が出現
×	故人が夢に現れ礼を言う	×	e. 出来事の結果型	故人が出現
×	御帳の布地を着物に仕立てて着ると何もかも上手くいき、立派な夫にも愛されて裕福に暮らした。その着物をしまっておいて、必ず一大事と思うような時に取り出して着ると、必ず願いが叶うのであった	×	b. 予言・神仏が出現型	同じ人物が何度も夢を見る
			その他	「夢」語を使った比喩表現
○	①が夢解きの女に代価を払い②の夢を取り、①は大臣にまで昇進し②は官職もないまま終ってしまった	されば、夢を人に聞かすまじき也といひ伝へたり。	a. 夢占い・夢解き型	夢の内容記述ナシ
×	主人（父親）はただの羊だと思ひ殺し、調理するが、皆何も食わず帰った。後に人々にわけを聞いて悲しみ嘆くうちに病氣になって死んだ	×	d. 出来事の実型	故人が出現
×	魚を食べて大きな骨が喉に刺さり、苦しみながら死んでしまい、妻はその後髪を一切口にしなかった	×	d. 出来事の実型	故人が出現
×	無名だった僧がことのほか美々しい姿で退出することになった	されば、人の祈りは僧の浄不浄にはよらぬ事也。只、心に入たるが験あるもの也。「母の尼して祈りをばすべし」と、昔よりいひ伝へたるも、この心なり。	d. 出来事の実型	

『宇治拾遺物語』における「夢」の分類

に拠る。

14	96	巻7・第5話	長谷寺参籠男、 預二利生一事	身寄りのない若い男	御帳から人が現れ「前世の罪の報い知らずに観音に愚痴を言うのはけしからぬことだが、少し助けてやろう。すぐにここを出て、手に触れた物をつかみ捨てずに持つておくことだ」という	×	×
15	101	巻8・第3話	信濃国聖事	①帝②聖の姉	①聖の言った剣の護法②仏が「これより南西の方にある山の雲のたなびく所へ行って僧を尋ねるがよい」と告げる	×	×
16	102	巻8・第4話	敏行朝臣事	①紀友則②三井寺の僧	恐ろしく忌まわしい感じの敏行が現れ、「四巻経を書きあげず死んでしまった罪により饜えようもない苦を受けているので、三井寺の僧に頼んで書写供養させてほしい」と言った	×	×
17	108	巻9・第3話	越前敦賀女観音助給事	娘	裏の堂から僧が出て来て「明日、男がここに着くのでその者の言うことに従うがよい」と言う	×	×
18	109	巻9・第4話	クウスケガ仏供養事	夢にとびいらんこちして			
19	112	巻9・第7話	大安寺別当女二嫁スル男夢見事	蔵人なりける人	あるとき昼寝をしていると舅の僧や妻の尼君をはじめ、あらゆる人が煮え湯を自ら立く立く飲んでおり、自分にも侍女が土器を台に据えて持って来た	×	×
20	118	巻10・第5話	播磨守子サダエブガ事	河内前司	海に落ちて死んだと聞いていた佐大夫が現れ、「この東北の隅で日に一度、樋爪の橋のもとに行つて苦しみを受けている。あと五日を経ても、六日となる巳の刻頃には牛を返す」という	○	明記ナシ。本文「[かゝる夢をこそ見つれ]」といひて過ぬ。」
21	121	巻10・第8話	蔵人頼死事	頭中将	故人の貞孝（高）が生前の姿で涙を流しながら現れ、私の死の恥をお隠しくださったことは、いつまでも忘れません」と喜ぶ	×	×
22	131	巻11・第7話	清水寺、御帳給女事	清水寺へ熱心に参詣する美しい女	①観音が現れ御帳の布地をよく畳んで前にお置きになった②犬防ぎの中に差し入れて置いた御帳をまた頂く	×	×
23	157	巻12・第21話	或上達部、中符之時逢二召人一事	夢見るこちして			
24	165	巻13・第5話	夢買人事	①ひきのまき人②国守の御子の長男の君	×	○	夢解きの女
25	167	巻13・第7話	或唐人、女ノ羊ニ生タル不レ知シテ殺事	母	亡くなった娘が青い着物を着て、白い布切れで頭を包み、髪に玉のかんざしを一揃いさして現れ「親に断らず勝手なことをした罪で羊の身を受けた私の命を助けてください」と言った	×	×
26	168	巻13・第8話	上出雲寺別当父ノ鯨ニ成タルヲ知ナガラ殺テ食事	上覚	たいへん老いた父が杖をついて現れ、「明後日未の刻に大風が吹き、この寺が倒れる。その時私はこの寺の瓦の下で三尺ほどの鯨になり、子供に叩き殺されそうになるので賀茂川に放してくれ」と言う	○	家族（明記ナシ）本文「[かゝる夢をこそ見つれ]と語れば、[いかなる事にか]といひて、日暮れぬ。」
27	191	巻15・第6話	極楽寺僧、施仁王経験一事	堀川太政大臣	恐ろしげな鬼どもが現れ、みずらを結った童子が鬼どもを打ち払った	×	×

※ 夢を見る者が複数である場合、本文に記述されている夢を見た順番に従い番号を付けた。

※ 複数の夢が登場する場合、本文に記述されている順番に従い番号を付けた。

※ 本文の引用は全て『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』（三木紀人・浅見和彦校注、岩波書店、一九九〇年）

- b-5 第九六話「長谷寺參籠男、預<sub>二</sub>利生<sub>一</sub>事」
- b-6 第一〇一話「信濃国聖事」
- b-7 第一〇八話「越前敦賀女観音助給事」
- b-8 第一一八話「播磨守子サダユフガ事」
- b-9 第一三一話「清水寺、御帳給女事」
- c. 出来事の発端型
- c-1 第九二話「五色鹿事」
- d. 出来事の真実型
- d-1 第二話「丹波国篠村平茸生事」
- d-2 第四六話「伏見修理大夫俊綱事」
- d-3 第五七話「石橋下蛇事」
- d-4 第六四話「式部大夫実重、賀茂御正體拝見事」
- d-5 第六七話「永超僧都魚食事」
- d-6 第八二話「山横川賀能地藏事」
- d-7 第一〇二話「敏行朝臣事」
- d-8 第一一二話「大安寺別当女ニ嫁スル男夢見事」
- d-9 第一六七話「或唐人、女ノ羊ニ生タル不知シテ殺事」
- d-10 第一六八話「上出雲寺別当、父ノ鯨ニ成タルヲ知ナガラ殺テ食事」
- d-11 第一九一話「極楽寺僧、施仁王経験<sub>二</sub>事<sub>一</sub>」
- e. 出来事の結果型
- e-1 第一二二話「蔵人頓死事」
- その他
- c-\* 第一九話「清徳聖、奇特事」<sup>38)</sup>
- 喩-1 第一〇九話「クウスケガ仏供養事」
- 喩-2 第一五七話「或上達部、中将之時逢<sub>二</sub>召人<sub>一</sub>事」
- さらに、このように分類した各説話において、夢を見る者、夢を語る相手、夢の内容、夢を見た結果などの項目を作成し（表1）にまとめた。すると、喩詞としての「夢」の用例を含む「その他」を除いて、夢の登場する説話は計二四話になる。
- これらの分類について説明を加えると、次のようである。
- a. 夢合せ・夢解き型（二話） 夢合せや夢の解釈が説話の展開に大いに影響する説話群である。この類型に該当する二話は、夢を語る相手を間違えたり、夢を語り夢解きを間違えるなど、夢を見た後の行動を誤って失敗する人物が登場する。第四話「伴大納言事」は、応天門の炎上事件でも知られる伴善男の出世と失脚が夢合せと結びつけられ、「高相の夢を見たのによしなき者にそれを語り、幸運をつかみそこねた話」<sup>39)</sup>とされる。第一六五話「夢買人事」には、夢解き女を訪ねて来た二人の男が登場する。吉夢を買い取って成功した

備中国の郡司の子「ひきのまき人」は出世し、夢を取られた国守の若君は官職もなく一生を終える説話である。

b. 予言・神仏が出現型(九話) 夢を介して予言を受けたり、夢に神や仏、観音の化身などが現れる説話群である。例えば、第八九話「信濃国筑摩湯二観音沐浴事」は、ある人が夢で聞いた予言通り、東国武士が聖視され、偶さか出家する説話であり、第九六話「長谷寺參籠男、預利生事」では、長谷寺に參籠した若侍が、夢でのお告げを信じ、藁一本から富裕な長者になる。第一〇八話「越前敦賀女観音助給事」では、貧しい娘が夢告げによって願望が成就するという確信を得る契機となり、夢が幸福獲得の実現のための装置として用いられている。

c. 出来事の発端型(一話) 起承転結の起にあたる。夢で見た事柄がきっかけとなり、事件が起こる。この類型に該当する第九二話「五色鹿事」では、国の后が夢に五色に輝く大きな鹿を見たことをきっかけに、大王は五色の鹿を探すように命令を下す。

d. 出来事の真実型(一一話) 起承転結の転にあたる。伏線が回収される過程に夢を用いている場合や、不可思議な出来事が起こった訳が、夢によって分かる説話群である。第五七話「石橋下蛇事」や第一六七話「或唐人、女ノ羊ニ生タル不知シテ殺事」、第一六八話「上出雲寺別当、父ノ鯨ニ成タルヲ知ナガラ殺テ食事」などは、

所謂畜生転生譚・異類転生譚と見做すことが出来るが、いずれも夢告げによりその事実が知らされる。夢が出来事の真実を明かす装置となっている。

e. 出来事の結果型(一話) 起承転結の結にあたる。ある出来事の後に、結果として夢を見る、夢を見ることによって物語が締め括られるケースである。この類型に該当する第一二一話「藏人頓死事」では、頭中將の夢に故人の貞孝が生前の姿で涙を流しながら現れ、私の死の恥をお隠しくださったことは、いつまでも忘れません」と喜び、故人が夢に現れ礼を言って説話は終わる。

その他(三話)に分類した第一〇九話「クウスケガ仏供養事」と第一五七話「或上達部、中將之時逢召人事」は、「夢にとびしたらんこちして」、「夢見るこちして」など「夢」という語彙を比喩表現に用いた説話である。

この中で、その他に分類した第一九話「清徳聖、奇特事」は、夢が出現する場面が少しばかり難解である。一九話は、清徳聖の亡くなった母の追善・転生の孝養話から聖の大食い話、師輔の靈眼力の話へと展開し、錦小路の地名起源譚として結ばれる。

清徳が亡くなった母を棺に入れ、愛宕山に運び、飲まず食わず、寝ることもせず、声をとぎらせることもなく千手陀羅尼を休むことなく唱えながら、この棺のまわりをめくり続けて三年になった。そ

の年の春、清徳は「夢ともなく、うつゝともなく、ほのかに母の声にて」仏になったと告げられる。

笠森勇氏は本話を「苦行を重ねるうちに懐かしい母が夢に現れてくる（中略）母を弔った聖が、その結果仏に生まれ変わって、餓える獣たちに食を施してゆくというありがたい話」と評価している。しかし、夢の中で母の声が聞こえたのだろうと安易に解釈しては、編者が折角「うつゝともなく」と記した意図が台無しになってしまうのではないかと愚考する次第である。

小林保治氏は本話について、次のように評している。

神仏や冥界にある者は夢を通してこの世の者と交信するのが古来からの例であるが、眠りをとらない清徳は母がほのかに次のように告げるを聞いたというのだ。

此陀羅尼をかく夜昼誦し給へば、我ははやく男子となりて天に生れにしかども同じくは仏になりて告げ申さんとて今までは告げ申さざりつるぞ。今は仏になりて告げ申也。

息子が不飲不食、不眠不休で誦呪を続けているというのに、いい気な亡者もあつたものである。ともあれ、清徳にはそれが「夢となくうつゝともなく」きこえた、としたのは伝承者の苦心の才覚で、さすがに巧みな処理というべきである。その瞬間に清徳の勤行は終わるのだが、その母が、男子変生・天界転生

を経て成仏することを、じつは彼は予想していたのだ、と伝承者は語り続ける<sup>④</sup>。

睡眠もせず何も口にせず手陀羅尼を唱える清徳は、勤行を終えるまで欲に耐える。ここで、最後に眠りにつくのではなく清徳の行動はようやく、禁欲してきたことから大食というふうに変化した形で現れる。小林保治氏という「伝承者の苦心の才覚で、さすがに巧みな処理」という評価は相応しい。

夢ともなく現ともなくという表現は『平家物語』第六卷の慈心房の段や、『保元物語』上・下巻にも見ることができ、『狭衣物語』第四卷には「夢現とも思し分かれず」という記述がある。この表現について「夢なのか現実なのか判断としないこと」と注釈されている<sup>④</sup>。このように、他文献においても夢ともなく現ともなくという表現は一般に用いられるので、とりわけ珍しい表現ではないが、『宇治拾遺物語』においては一九話以外の収載話には見られない表現である。眠りをとらず勤める聖に母の声を伝える手段として「夢となくうつゝともなく」という表現を用いることにより、その中に組み込まれた巧妙な編者の叙述力が垣間見える説話だといえよう。

まとめにかえて

本稿では、『宇治拾遺物語』における夢のはたらきや作用について

て検討するために、夢が登場する説話を類型に分類することを試みた。全一九七話の説話から、ストーリー展開における夢のあり方を基準に計二四話の説話を「a. 夢合せ・夢解き」型(二二話)、「b. 予言・神仏が出現」型(九話)、「c. 出来事の発端」型(一話)「d. 出来事の真実」型(一一話)、「e. 出来事の結果」型(一話)に分類した。その結果、「出来事の真実」型が一話と最も多く、夢を通して何かが知らされるための装置として夢が用いられる傾向が見て取れる。次に、「予言・神仏が出現」型が九話あるが、この類型において神仏の夢告げは、仏教信仰の効験を公然と記しているわけではなく、観音菩薩や仏が夢に現れたからといって一概に信仰や仏教思想を窺えるとは言えず、世俗化されていることに注意すべきである。

纏めると、『宇治拾遺物語』における夢の出現する二四話は、大きく次のような側面で描かれている。

- ① 夢が、説話全体の展開に、どのように、どれほど影響しているのかという観点から、夢がこれからの出来事の説明や案内になっっているか、夢がこれまでの不可解な出来事の種明かしになっっているか、夢そのものが解釈が必要な謎めいたもので、その謎解き自体が説話全体にかけて展開の軸になっっているか。

『宇治拾遺物語』における「夢」の分類

- ② 夢に出現するものが何かという観点から、死者(故人)か、神や仏などの超越的な力を有する人格的存在か、またはそのような人格的存在が出現しないか。

紙幅の都合上この検討については別稿に譲りたいが、その他にも一つの説話の中で夢を見た人物が複数の場合(二話、一〇一話、一〇二話、一六五話)や、一人の人物が複数の夢を見る場合(一三二話)、夢を他人に語る場合(二話、四話、五七話、六三話、六七話、八九話、九二話、一一八話、一六五話、一六八話の計一〇話)と、語らない場合(四六話、六四話、七〇話、八二話、八八話、九六話、一〇一話、一〇二話、一〇八話、一一二話、一二二話、一三二話、一六七話、一九一話の計一四話)があるという点は、検討の必要があると思われる。

今回の作業は、『宇治拾遺物語』においてどのように夢は素材として用いられているかという問題を明らかにするための重要な基礎作業となると考える。

今後は各類型の説話の中からいくつかを取り上げ、夢がどのように説話の方法として用いられているのか明らかにして行きたい。

注

- ① 柳田國男「夢と文藝」『定本 柳田國男全集』六巻、筑摩書房、一九

- 九七年。
- ② 西郷信綱『古代人と夢』平凡社、一九七二年。
- ③ 河東仁（『日本の夢信仰——宗教学から見た日本精神史』玉川大学出版部、二〇〇二年、一四九頁）氏の論考によると、「夢に明らかな凶兆を見た場合、災厄を避けるため、悪夢を祓うための呪文が唱えられることもあった。こうした凶夢の吉夢への読み替え、あるいは凶夢そのものの除去を「夢遣え（ゆめたがえ）」と呼ぶ」と定義している。
- ④ 古川哲史「夢に現れた王朝人の人生観」「夢——日本人の精神史」有信堂、一九六七年。
- ⑤ 樋口清之「一章 日本人の眠りと夢」『日本人の歴史 第一〇巻 夢と日本人』講談社、一九八二年。
- ⑥ 佐々木孝二「中世説話の構造における夢の役割と東北における展開」『文経論叢』二五巻三号、一九九〇年。
- ⑦ 井本英一「夢を買う話」『昔話伝説研究』一七号、昔話伝説研究会、一九九一年。
- ⑧ 酒井紀美「夢語り・夢解きの中世」朝日新聞社、二〇〇一年。
- ⑨ 会田実「物語の中の予言——夢合わせと言葉とから——」『東アジアの今昔物語集——翻訳・変成・予言』勉誠出版、二〇一二年。
- ⑩ 池田利夫「浜松中納言物語の夢（上）その語彙の頻度に就いて」『芸文研究』一八号、一九六四年九月、一〜一四頁。
- ⑪ 注③に同じ。
- ⑫ 森田兼吉「夢よりもはかなき——女流日記文学と夢——」佐藤泰正編『笠間選書（九三）』梅光女学院大学公開講座論集 第三集 文学における夢——一九七八年四月。
- ⑬ 山手節子「宇治拾遺物語における夢について」『国語国文論集』四号、一九七三年。
- ⑭ 山口康子「語られる夢『宇治拾遺物語』夢の引用」『長崎大学教育学部人文科学研究报告』五七号、長崎大学、一九九八年六月。
- ⑮ 『宇治拾遺物語』の説話配列の問題に関しては様々な見解があるが、『宇治拾遺物語』に収載されている各説話は、編者が何らかの意図を持って配列したのであろうという指摘は西尾光一氏、益田勝実氏、三木紀人氏、小出素子氏らによってすでになされている。特に益田勝実氏は類聚性により配列されている説話が「連想の糸」で繋げることが可能であるとされた（西尾光一「『宇治拾遺物語』における連纂の文学」『清泉女子大学紀要』三二号、一九八三年二月、益田勝実「中世的諷刺家のおもかげ——『宇治拾遺物語』の作者」『文学』三四—一二号、一九六六年一月、三木紀人「背後の貴種たち——宇治拾遺物語第一〇話とその前後」『成蹊国文』七号、一九七四年二月、小出素子「『宇治拾遺物語』の説話配列について——全巻にわたる連関表示の試み——」『平安文学研究』六七輯、一九八二年六月）。
- ⑯ 益田勝実、前掲注⑮に同じ。
- ⑰ 前掲注⑮に同じ、一四頁。
- ⑱ 同、一一頁。
- ⑲ 渡邊綱也・西尾光一校注『日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九六〇年、一五頁、西尾光一氏による解説に依る。
- ⑳ 小出素子「『宇治拾遺物語』の説話配列について——全巻にわたる連関表示の試み——」『今昔物語集と宇治拾遺物語 説話と文体』一九八六年七月、一七三頁。
- ㉑ 前掲注⑱に同じ、一〇頁。
- ㉒ 同、一一〜一二頁。
- ㉓ 前掲注⑲に同じ。
- ㉔ 中田祝夫校注『新編日本古典文学全集 日本霊異記』小学館、一九九



五年、二二二頁。

25 木村紀子「観音譚の土着と生成」『奈良大学紀要』一七号、奈良大学、一九八九年。

26 同、一九頁。

27 江口孝夫「夢についての研究」『日本古典文学』風間書房、一九八七年。

28 同、一二四頁。

29 小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集』(小学館、一九九六年、五三八頁)における『宇治拾遺物語』の各説話に関連ある文献の所在を示した関係説話表に依る。

30 三木紀人・浅見和彦校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』(岩波書店、一九九〇年、五一九頁)においての同話・類話・関連話を分ける基準によると同文性の強く見られる文献、同文性は見られないが、同話的傾向の濃い文献、その他を各説話の類話として分け、同文性の強く見られる文献を「孤立話」とすると『宇治拾遺物語』収録話一九七話のうち全二八話になる。廣田收氏はこの問題について「これらの抽出は、ひとつの目安に過ぎない。ただ、これらは概ね、都市伝説もしくは世間話、噂話など、古くからの書承の説話であるよりも、口承説話ともいべき、伝承性の強いものが紛れ込んでいるのではないかと見做せる(廣田收「孤立話から見る『宇治拾遺物語』の特質」・仏教の世俗化と本覚思想)『同志社国文学』八一号、二〇一四年、七七頁)」と指摘されている。

31 廣田收「孤立話から見る『宇治拾遺物語』の特質」・仏教の世俗化と本覚思想」『同志社国文学』八一号、二〇一四年、六七～六八頁。

32 小林智昭校注『日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九七三年、一八三頁。

33 前掲注⑨に同じ、六三二頁。

34 前掲注⑭に同じ、八頁。

『宇治拾遺物語』における「夢」の分類

35 ノ・ヨンユン「説話の中の放尿の夢を売る行為の心理的特徴とその意味——説話〈辰義買夢〉と〈文姫買夢〉を中心に——」『韓国学研究』四〇集、高麗大学校韓国学研究所、二〇一二年、四八頁。

36 ノ・ヨンユン氏は「三國遺事」における姉妹の夢のやりとりについて「妹に吉夢を売る姉の内面には、妹への愛情と善良な心が表れたのである。放尿の夢を売る行為の意味は相手を上げてあげる行為で、その裏面には自信の望みも相手を通して成就することを願う思いがある」と説いている。氏の見地を踏まえ、筆者は、夢での事柄に対する意見を求めたり、このような夢を見たという共有、さらに、夢での事柄から相手に助言するために血縁関係の人物や最も身近な人物に夢を語る場合は、的確な解釈や正解を求め、夢合せの専門家として見做し、夢の解釈を委託する場合は異なる信頼と情があると考ええる。

37 伊東玉美『宇治拾遺物語のたのしみ方』新典社、二〇一〇年、一三六頁。

38 文脈上の表現から正確に夢で見た事柄とは言い切れないが、仮にストーリー展開における「夢」のあり方を基準に準ずるものとして類型分けするとしたら「c. 出来事の発端」型に入るものである。

39 三木紀人・浅見和彦校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年、一四頁。

40 笠森勇「室生犀星の生母願望——短篇「聖」と「清徳聖」(『宇治拾遺物語』)「解釈」四四号一九・二〇月、一九九八年一〇月、四七頁。

41 小林保治「清徳聖の奇特——『宇治拾遺物語』小考——」『學術研究 国語・国文学編』二二号、早稲田大学教育学部、一九七二年二月、一二～一三頁。

42 小町谷照彦、後藤祥子校注『新編日本古典文学全集 狭衣物語』小学館、二〇〇一年、二〇七頁。